

住宅改善論にみる仏壇・神棚と 儀礼空間

Butsudan, Kamidana, and Ceremonial Space in Housing
Improvement Discourse

大場あや

OBA Aya

はじめに

① 生活改善と住宅改善

② 民俗学における民家研究と仏壇・神棚

③ 住宅改善論における仏壇・神棚と冠婚葬祭

おわりに

【論文要旨】

明治末期以降、「生活の改善」「合理化」をスローガンにした運動が繰り返し取り組まれてきた。なかでも冠婚葬祭は、戦前・戦後を通じて最も重要視された改善対象の1つだったが、なかなか成果が上がらなかったことが指摘されている。一方、成果があったと評価される分野として、「住宅改善」が挙げられる。衛生的な住環境、合理的・効率的な間取りと生活導線、時代の進展に伴う文化的な生活および家族中心の生活が営めるような住宅が提示された。

本稿では、住宅改善に関する取り組みに着目し、仏壇や神棚を中心とする家内祭祀および冠婚葬祭など自宅で行われてきた儀礼がどのように捉えられ、いかにあるべきとされたのかを跡付けていく。大正期から戦後にかけて、運動推進側が掲げた改善方針・項目、改善報告書を手がかりに、住宅空間における家内祭祀・儀礼の語られ方の変遷にアプローチするものである。

仏壇・神棚および冠婚葬祭の扱いは、住宅改善における中核的な関心ではないため資料は部分的なものに留まるが、主に居間・寝間の改善において仏壇や神棚をどこに置くべきか、また、冠婚葬祭の改善の流れと呼応した座敷・客間の改善が記されている。その位置付けられ方は時代とともに変化し、とくに戦中期は神棚と仏壇の住宅における重要性が強調された。

住宅改善の取り組みを経て、住宅のあり方は改善された一方で画一化もされていった。冠婚葬祭を自宅で行うことを想定しない間取りが採用されるようになり、仏壇・神棚は居間・寝間の空間において床の間、押し入れ、戸棚と一直線に並ぶ造りが増えた。また、核家族化および住宅の小規模化、住宅の西洋化に伴い、仏壇・神棚をはじめから設けない住宅計画図が増加した。住宅改善の具体的な影響やキーパーソンとなる人物の「住宅改善論」の検討が今後の課題である。

【キーワード】 住宅改善, 新生活運動, 仏壇, 神棚